
あたしは、

香坂 奈桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは、

【ZZマーク】

Z6995T

【作者名】

香坂 奈桜

【あらすじ】

彼がだいすき！ 好きすぎてたまらない“あたし”と“彼”的短編小説。恋の切なさ、辛さ、苦しさ、楽しさ、いくつもの要素をつめ込んでみました。作者自身、相当楽しみながら書きました。

(前書き)

自由に育ててくれた両親へ、
いつも応援してくれる友だちへ、
これまで感想をくれた読者さんへ、
これから話を読んでくれる貴方に、
感謝のきもちを込めて。

なきとうになる。

背の高い後ろすがた。体型はほつそりとしているのに、肩幅はがつしつとしている。男のひとなんだなあと、思つと、もつ今すぐ抱きつきたい、そんな衝動に駆られる。

彼は本棚で雑誌を物色している。彼が好きな雑誌は、あたしには理解不能。好きなものをみる、好きなことをする、その瞬間の田が好きなんだよね。だから、バイクやら男性ファッション誌やら、そんな本の内容には全く興味がわかない。

それから、ソファに座つて、雑誌を読みはじめた。その横でじつと彼をみつめるあたし。

ねえ、じつち向いて。
あたしを見てよ！

小さなあたしの、ちこさな願い。ちいさな、ちこさなテレパシー。じつとみつめて、田で訴えても。今日もまた、叶えられないでいる。

あたしの心のなかなんて、想像したこともないんだりつむ。

ぐつモー！
じつじつときは、ついイタズラしてやりたくなる。

構つてほしいなんて言えないもん。我が儘な女だなんて思われたくもないし、せっかく苦労して手に入れた彼のこころなんだもん。ちょっとくらいの我慢はもう慣れっこだ。恋は、忍耐、我慢に、決断力だというのは、長すぎた彼への片思い時期に実証済み。

よし。片膝立てて、読書をする彼の腕をすこし搔いてみる。ちょい、ちょい、読書の邪魔をしても、怒られちゃうから、バレないようにうそつと。

……バレない。もうちょっと分かりやすく引っ搔いたら絶対怒られる。どうせ、あたしより、バイクが好きなんでしょう、なんて僻んでみたりして。

たとえばこんな風に、何も会話がなくとも、マイペースで自分の世界をもつてる彼についても、あたしは幸せだと思つてゐるときどき、僻みっぽくなるけど。

好きなひとの隣にいられるだけで、本当にしあわせなんだもん。弱音を吐いてくれるのも、仕事から急いで帰つてくれるのも。全部、ぜんぶあたしだけの彼。世界中でたつたひとり、あたししか知らない彼だから。

かわいいね、って言つてもらいたくて、彼のためにもつともつと、自分を磨こうとする。そんなあたしに、やさしい気持ちをいつもپ

レゼントしてくれる。彼の笑った顔をみているだけで、じいじは穏やかに満たされていく。

恋をすると女の子は綺麗になれるっていうけれど、あたしの場合は容姿だけに留まらないんだよね。じいじまで綺麗でいられる気がするから、恋つてふしげだよね。

そんなことを考えてたあたしの隣で、彼は携帯を取り出していたなに、メール？　ふいに寂しさがあわってきて、あたしが擦り寄るみたいに甘えると彼はいった。

「いめん。ちょっと、出かけてくる」

心地よい温度がはなれた瞬間、あたしは思わずあの女を想像した。

行かないで！

伝えたいことばほど、いつも声にならない。胸のした辺り、そこがきゅうんと苦しくなる。そして溢れてくる激しい感情。自分が自分じゃなくなる、激しい憎悪は次々と溢れては、あたしを黒く染めてしまつ。

彼は何も言わない。あたしは何もいえない。だけど、あたしは知つてる　あたしに好きだと言つた同じ口での女に口づけているのを、あたしだけは知つてこる。

扉の閉まる音が、じずかにひびいた。

もう、限界だ。

耐えられないと思った。知らないふりは、もうできない。

ねえ、今日が何の日か知ってる？ あたしの誕生日なんだよ。彼女の誕生日を忘れて、他の女に会いにいくなんて絶対に許せない。絶対、問いつめてやる。それで、もう別れてやる！

出でつてやるんだから！ ああ、彼じやなくともいいんだ。そんな考えに行き着いたとき、あたしは決意した。

それから、数時間後。待ちにまつた扉がひらく。

誰と会つてたのよ、と喉まで出掛けたよくある修羅場文句は、彼の表情のまえに消えさつた。

ねえ、どうしたの。まず、その言葉が口から出たのだ。彼の顔。土色で赤みがなく、瞳の奥がどことなくくらい。今にも倒れ込みそうな、そんな、気分がわるいときの顔をしていたのだ。

そして、彼はこう告げた。

「なあ、オレ振られたんだ。慰めてくれよ…………」
まずはその香りを落としてこことか、やつぱり他に女がいたんだとか、言いたいことは色々あった。だけど、痛々しいその表情を見ていたら、やつぱり胸がぐるぐるになってしまつ。

あたし、ばかなのかな。こんなに傍にいて、浮氣されてもまだ、彼を憎めないでいる。さつきの決意はとうに消えて、彼への純粋な愛情だけじゃない、不可思議な想いを感じていた。

拭いられない嫉妬心。この想いは誰より大きいけれど、少しだけ濁つてしまつた。今までとおなじ気持ちには、到底戻れやしないけれど。

ちらりとみた彼の目は、どこか頼りなく、表情はなんとも情けない。それを見ていたら、またどこからか愛おしさが訪れてきた。

……あたし、やつぱりばかだ。浮氣を繰り返してはあたしの元に戻つてくる彼もばかだけど、そんな彼がまだこんなに愛おしいなんて、ほんと救いようがないよ。

救いようがないばか同士、お似合いだよ。

あたしだけは、ずっと傍にいるよ。どんなになつても、ずっとずっと、一緒だからね。そういうて、香水のにおいがする薬指をべろ

りと語める。

「あつがとつ、//ーちやん。やつぱりオレこな前だけだよー。」

現金なやつだけじ、女に振られたくらいで泣く、そんな可愛いこと
ころも好きなんだよね。ちいさなちいさな稻妻が、あたしの喉でな
つている。しゃがんで、あたしの震えるのどほとけを触つて、彼は
やつとりれしそうな顔をする。

ああ、よかつた。

「こやん

もつ、浮氣しちゃダメよ。そういうと、彼はあたしの頭をひとなで
する。その日彼が買つてきた、誕生日プレゼントの缶詰めは、いつ
もよつ濃い、まぐりの味がした。

あたしは、ねい。

（後書き）

今流行りのTwitterなるものをやっています。

Twitterにて、たまたま前作の感想を頂き、もう嬉しくて、わたしに恥というものがなければ、うひょーーと書いて飛び上がってましたね。

友達へのメールでも書いてましたしね（笑）

とにかくモチベーションだけが膨らみにふくらんで、

「あー！なんか書きたいーー！」

でも、わたしが得意なのは長編ですし、複雑難解。ナンジャイナーなやつらばかり。設定段階で煮詰まっているやつらばかり。

「何かー。何かないかーー何かネタを……」

と、ネタに飢えたわたしが見つけたのは、今にも投稿しようと練っていたツイッター小説でした。

こやつは、かなり王道パターンですが、自分らしくてかなり気に入っています。

そして、そして！

久しぶりの投稿で、ビックセビックしてこます。

ほんとに、いつぶり！

2006年で、わたしいつ書いたやつだよ！

まだ、未成年じゃないですか！

……小説とちがい、あとがきは自由に書けるから好きです。

ミステリアスな作者を気取りたかったんですが、ネットでおともだち+作家ともだちがほしいため、あっせんやめました。

ここまで読んでくれたみなさん、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6995t/>

あたしは、

2011年10月3日10時32分発行